

「真下飛泉伝」の試み

——若き日の飛泉——

宮 本 正 章

一

飛泉・真下竜吉は、明治十一年（一八七八）十月十日未明、京都府加佐郡河守村に農業真下石次郎（二十五歳）と妻すて（二十七歳）の二男として出生した。^①

河守村は明治二十四年に、関、金屋、波美、上野の四ヶ村を合わせて、河守町となり、昭和二十六年には、近隣の河守上、有路上、有路下、河東の五ヶ村と合併して、大江町となったので、現在は、その出生地を大江町新町と称している。この稿では、飛泉生存時の河守町の呼称を使って論をすすめる。

加佐郡は、『加佐郡誌』によると、

「丹後国の東部を占め、東は福井県大飯郡に隣し、南は京都府何鹿郡に界し、西南隅は天田郡に連り、西は与謝郡に接し、北方は日

本海に面している」地域である。郡の西部に位置し、由良港に注ぐ由良川に沿って、酒吞童子伝説で名高い大江山南麓に細長く延びているのが、河守町である。この地には江戸時代からかなりの商工業者があり、明治九年の物産取調帳をみると工産物が農産額を上まわっている。特に蠟燭製造は江戸時代からさかんで、十数軒の業者がおり、全国的にかなりの販路を持っていた。^② かつて、飛泉は郷里河守町を次のように叙した。

京都を去る西北二十五里、由良川に沿ふて一直線に細長き小駅あり、河守と云ふ戸数百而かも町と称す。糸繭製造を以て名あり、予一年丹後に旅行して大江山の旧窟を探り、元伊勢に出で、天岩戸の奇観を見、遂に福知山迄の予定に違ひて、三里の北方、即此小駅に日を暮しぬ、中央の一旅館に宿泊し、晚餐に待する。（『よしあし草』第二十号・明治三十二年十一月）

河守町が繭糸製造をもって名があったのは、明治二十年以後のこととて、養蚕や製糸業は江戸時代末期には、この地方の産業の一つとなっていたとはいえ、明治十年代前半までは、徹々たるものであったらしい。前記の物産取調帳でも、生糸の生産額よりは、蠟燭、清酒が多いのである。農家は、旧幕時代そのままに、米麦中心の農業であり、父の石次郎も合わせて五反にも足らぬ田畑を耕す傍ら、少しばかり蚕を飼っていたという。^④

当時の真下家の家族は、夫婦と九年生まれの長男松之助、生まれただばかりの滝吉の四人であった。その後、十三年に三男国蔵、二十三年に四男儀一郎が誕生した。飛泉は、幼年期の生活について、次のようにうたっている。

どろどろした黒砂糖を

掌になすりつけてもらって

街道に飛んで出て

自慢顔に血の出る程しゃぶり

口のふちに輪をいれて

やがて一番星を

城山の嶺に見て育った

私は田舎の子供であった。

〔『飛泉抄』林田久吾氏へ〕

「真下飛泉伝」の試み

飛泉は数え年八歳になった明治十八年に、村立河守小学校へ入学した。この学校は五年の「学制」発布により、村内の清園寺の一部を借りて、豊岡第十四区一小区河守学校として六年に開校したもので、飛泉の入学時は、十三年の「改正教育令」に基づき、初等三年の義務教育課程しか設けられていなかった。^⑤翌十九年には、「小学校令」が公布されて、尋常四年、高等四年を修業年限としたので、飛泉はこの新制度の恩恵を受けて、二十二年に河守尋常小学校を卒業した。飛泉自身は、さらに勉学を続けることを希望しただろうが、それ以上の勉学は、断念せざるを得ない状況にあった。当時の河守町には、高等小学校は設置されていなかったし、郡内にも、田辺藩学問所明倫館跡に設けられていた明倫小学校に設置された加佐郡組合高等小学校があるだけであった。したがって、現在の舞鶴市全域、宮津市由良、大江町の極めて広範囲を校区とするこの学校へは、遠隔地からの通学という大きな問題があり、富裕な子弟しか就学しなかった。飛泉の両親には、舞鶴の学校へ停をやることなどできはしなかったし、そこへは、物持ちの子供だけが行くものと、思い込んでいたから、飛泉は兄も奉公している隣家の製糸家「丹要」へ奉公に出ることになった。

「丹要」の主人は安田要助といって、二十人程の工女を使って糸をひき、傍ら、主に郡内産の黄櫨の実で生蠟を製造していた。飛泉

は製糸工場、兄は製蠟所に働いていたという。^⑧

当時、この新町には六軒、河守町には十五軒ほど糸ひき屋があったという。その規模は小さく、最も大きいので五十人取、小さいのは十五人取とみえる。工場での男衆の仕事は、水汲み、繭煮き、運転回し（器械を動かす）、揚杵（杵の糸を大杵に揚返して乾かす）、結束（生糸を奇麗に束ねる）等であったが、飛泉のような年少者には、結束という軽労働が割当てられていたと思える。しかし、糸時とよばれる夏場になると、午前三時半に起き、午後七時頃までの長時間、繭を煮る湯気の充満する酷暑の中で働かねばならなかった。^⑩

この苛酷で不健康な労働は二年間続いたが、父が蠟燭屋を始めることとなったので、兄と共に奉公をやめた。生蠟は「丹要」で買い、蠟燭は一家総出で作り、主に農閑期に行商に出た。父が丹波、但馬方面へ、兄と飛泉が宮津や舞鶴辺へ売りに出た。時には、河守産の茶や和紙も売ったという。^⑩

二十五年、加佐郡組合高等小学校は廃止し、郡内の隣接町村が組合をつくり、高等小学校を設立することとなった。これは、教育について一般の関心が高まると共に、学令児童の就学率も高くなり、高等小学校教育を望む声が強くなって、加佐郡会で高小増設問題が論議されるなど、遠隔地での分立を主張する声が強くなった結果であった。河守では河守町外五ヶ村組合高等小学校の設立がきまり、

十二月に元浸長学校跡に開校した。^⑩

十五歳になっていた飛泉は、高等小学校進学を志望したが、父が肯んじなかった。農業、養蚕、蠟燭屋を営む真下家にとって、飛泉は大切な労働力であったし、義務教育以外の学校は裕福な家庭の子弟が行くものと、頑固に思い込んでいたらしい。「丹要」の一人娘である安田カネ氏の談に飛泉は入学を父に請うては、きびしく叱責されて、よく泣いていることがあったという。結局、飛泉に同情する丹要の主人の強い説得と、しっかり者のすての愛情が石次郎を屈服させて、三年生に編入することとなった。四年間の課程で、突然三年編入とは、いささか奇異な感じがするが、当時のおおらかな学制であるから、年令を考慮しての処置であつたらう。

高等小学校の初代校長に組合長平野某から、懇請されて赴任したのが、隣村河東村の涵養尋常小学校の訓導の小墻近太郎であった。彼は、

「妻子を河守に残し、一切家庭を省みず、只一人宿直室に起臥して青年の夜間補習教育に専念、史書、漢学、数学、作文を授講するの外、昼間暇を作つて家庭訪問し、卒業生を主体に村民男女と喜憂を共にし、敢えて倦怠せず、愛村愛育の熱意充滿真に偉大と称すべきか。」（『河東史誌』）

と讃えられた教師であった。校長就任以来、小墻は寢食を忘れて、

この学校の充実に尽力した。飛泉は、この校長の人格に打たれ、将来教育者たらんとする気持ちが生えたと考えられる。後年、彼は略歴中に、在学中「小墻近太郎氏に厚情を受く」と記している。小墻も後年飛泉を追想して、明治二十五年創立の際の組合高等学校の生徒は、多士濟々という風で、後に名を成した者が多かったが、飛泉は常に級長として重きをなしていた非常な秀才であったこと、彼をして高小卒業学界に逍遙せしめたなら、其の就る処甚だ大であつたらうが、京師入学迄の二、三年間を軋々空費せしめたるは惜みても余りある、と語っているように、特に目をかけた生徒であつた。

翌二十六年、高小四年在学のまま、隣村河西村の公庄小学校の授業生となつたと、その略記に記すが、このような処遇も、飛泉の家庭の経済を慮る小墻校長の配慮であつたと思える。二十七年、高小を卒業した飛泉は、「准教員講習」を受けて、准訓導となり、ひき続き公庄校に勤務した。この年の三月、隣家の「丹要」の長女が誕生し、カネと名づけられた。飛泉は、次のような狂歌を作つて祝した。

金にかね其の子の年も金のかずいとも嘉たし七福の家
いとハカネさんの母親の名、嘉七は要助の通称であつたという。

代用教員として勤務しながら、師範学校進学の希望を持つようになつた飛泉は、小墻校長や公庄校の一ノ瀬訓導の助力を得て、父も

説得、無事合格して、二十八年の三月下旬、上京することとなつた。古老の思い出話に、飛泉が兵児帯姿で町内を回つていたというのがあるが、これは京師範合格の希望に満ちた彼の姿を伝えているように思える。

① 飛泉の生家は、地所、家屋とも隣家の安田家に売却され、現在、安田製作所の（安田明広氏経営）の物置となつている。やや離れた所の地区公会堂前に、「戦友作詩者、真下飛泉誕生の地」の碑が建つている。

② 「ふるふる町工場」『大江風土記』第三部、大江町教育研究会、（一九七三・九・一）。

③ 「明治九年物産取調帳」十四大区一小区（旧河守町）に、清酒三五〇石一二〇〇円（一升六錢）、ろうそく四八五〇メ、三三九五円（一メ七〇錢）、生糸九二メ六〇〇匁、一六六八円（一メ一八円）、種油三八石、五六〇円（一升二〇錢）等の記載がある。

④ 飛泉令弟池田儀一郎氏談、舞鶴市字四一、元舞鶴市立図書館長。

⑤ 河守村、関村、金屋村、波美村、上野村、内宮村、天田内村、二俣村、仏性寺村、毛原村、北原村、橋谷村、蓼原村の十三ヶ村で設立した。後各村分離設立す。

⑥ 「改正教育令」の修業年限は、初等三年、中等三年、高等二年で初等三年を義務教育年限とした。

⑦ 「小学校令」は尋常四年を義務教育年限とした。学制変更により二十一年には、現在の大江町役場のところに、河守尋常小学校を設立した。

⑧ 池田儀一郎氏談。

⑨ 「糸ひき工場」『大江町風土記』第三部、くらしと文化、大江町教育研究会編（一九五九）、新町に六軒、清水三軒、木町一軒、下町三軒、関一

軒とある。(以上は旧河守町)。

⑩ 「社会百方面」製糸工女。『よしあし草』第二十号(三二年十一月)。

⑪ ⑫ に同じ。

⑬ 池田儀一郎氏談。

⑭ 十年、金屋村、波美村、上野村三村は河守学校より分離、波美の一ノ宮舞堂に浸長小学校設立。二十年、再び河守に合併する。現在の府立大江高校の場所である。

⑮ 「真下飛泉について」佐々木仁衛『岳南』(昭和十五年十二月二十五日)、府立福知山中学校。この二十三年間、転々空費の文言は事実と相違している。

⑯ 『戦友』の作詞者真下飛泉その実像』『京都新聞』(昭和五三年一〇月一四日)夕刊。

二

明治二十八年四月、飛泉は京都府尋常師範学校に入学した。当時の京師は上京区寺町荒神口松蔭町にあった。現在の府立鴨沂高校の場所である。河守で首席を争った朝輝記太留も一緒に入学した。

当時の京師は、桓武天皇平安奠都千百年紀年祭、博覧会、京舞鉄道の敷設等で、経済界は活気づいていた。田舎者の飛泉の目を奪ったものは、岡崎で開催中の第四回博覧会であった。明治政府の最も力を入れた工業館や農業館、機械館の最新式の機械製品は飛泉を引きつけて止まなかった。「山出し」だの「ポット出」だのと嘲笑される純真な青年の心にそれらを通して、新時代の趨勢が明確な形を

とって感得されるのであった。彼はこの時期、工業化学上の発明発見に熱中するようになる。発明熱にとりつかれた青年の軌跡は、「傾学漫語」、「水底の玉」と名づけられた和紙を綴じ合わせたノートに、図解入りで詳細に記録されているが、その回旋揚水器の冒頭には、次のような決意が記されている。

「余が此器ヲ発明セント企テタルハ、実ニ明治二十八年四月以降トス。余ガ尋常師範学校ニ入ルヤ一事ヲ予期セリ。ソハ他ニアラズ。課業ノ余暇殊ニ多シ。其復習ノ一部ヲ割キ以テ一事ヲ発明スベシ。四年ノ長月日必ズ成就スベシト。」

彼が「余が脳中ノ黄金」とよんだ発明ノ種目たるや、約三十種に及んでいて、たとえば、回旋揚水器、回転画器、排気的金庫、蠟燭製造機、株切り鋸、坂に於ても労少なきフライホイール兼車輪、二人乗自転車、電気鉄道、軍用射火器、降火器等々であった。^①「飛泉妙」の編者で、飛泉の最もよき理解者であった西川百子が、^②

「その研究心に篤くして、利用厚生の用意の深き、真に三嘆に値ひせずや。運命若し故人を教育界に送らざりしならば、今日、わが発明家列中に、飛泉の名を見ること疑ひなからむ。」^③

と書いてはいるが、いささか蟲眞のひきたおしの感がある。そのおびたらしい「発明」は、実用化できるものではなく、いわば、彼の空想の産物であった。このうち、回転画器のみ、後年手を加えて、

小学校図工科用具として、実用新案特許をとったが、売れた記憶がないとは、池田氏の談である。飛泉の発明熱は、機械工業化に狂奔する日清戦争前後の時代風潮をまともに受けた野心的な青年の夢の発露に過ぎなかったといえよう。

彼の書生々活は、師範学校生であったから、食物、被服及び雑費（薪炭、油、修理、湯浴、療養費）の名目で、学資が官給されていたが、小遣いは故郷へ無心するより仕方なく、彼の自伝的小説「心の雲」（『文庫』第九卷第五号、明治三十一年五月）によって、想像するに、そのつど若干の送金を受け、時には母の筆で次のような手紙が添えてあったと思える。

「時分柄相冷と申候が、そなたには恙もなく勉強致居候や、当方も無事に暮し居候、而しながら申遣はし候は如何に候へども、家の商売は不景氣ばかり打つゞいて甚だ困り候に付、そなたにも可成勉強のみして、むだなる事には金銭を費はぬ様、心がけ有之べく、それとも是非入用の分は、如何にしても心配致すべきにつき兎角勉強專一にして、一時も早く帰郷の上、家事向御手伝ひの程待居候、父上はたとへ中途で帰国する様申候とも、そこはいかにしても、そなたの爲め、よき様に相計ひ申すべきに付、此段はまず安心なさるべく、返すくも、しまつして勉強第一に祈上候。」

「真下飛泉伝」の試み

安田カネさんの思い出話に、母親のすてが自家製のこんにやくを家の縁側に置いて売っていたとあるが、このようにして得た金を飛泉の小遣いに送ってやっていたのであろう。

飛泉が師範三年になった三十年八月の『少年文集』臨時増刊『秀才叢』に、小説「額の玉」が懸賞応募当選として掲載された。『博文館五十年史』（博文館昭和十二年刊）によれば、『少年文集』とは、博文館が発行していた『少年世界』が「懸賞課題作文寄書が毎号机上推かく積み、其の一部分を掲載するに過ぎぬ故、此年一月より、其等の寄書を中心として、毎月一回発行」したもので、その『少年文集』に「尚ほ掲載し切れず、時々臨時増刊として発行」されたものが『秀才叢』であったという。三十年二月の、『少年文集』（第三卷二号）の広告によれば、「予告の如く本誌は本年春秋兩季に於て兩回の臨時増刊を行なひ、秀才叢と題して前後兩編の好冊子となさんとす」とあり、投書には課題が与えられていて、和文などは、観花の記、春夜漫歩の記といった題が出されているが、小説には、「題及文体随意、但し猥褻に渉るものは取らず」とあって、特別な課題はない。

飛泉の小説「額の玉」は、貧しい父母の残した借財のために、金主の奴隷のような身分になって扱き使われているよるべき清次という青年が、荷車を引いて弁則天の祠の前の急勾配の橋を渡ろうと

するとき、疲労のために、どうしてもこの橋を越えることができない。このとおり、後押しをしてくれたのが、隣村の豪農の娘であった。この娘に恋するようになった清次は、夜毎その門前を徘徊して、少女の弾く琴の音に聞きほれる。ある日、暴風雨が襲い少女の村の川が氾濫したことを聞いた清次は、豪雨の中へ飛び出す。すでに、主人から汗と涙の二年間の労苦も結局は借金の利子を償うばかりと聞かされたとき、生きる望みを失っていた。この世に寸分の望みなき命を彼が一日延ばしにしていたのは、恋する少女の弾く琴の音を今一度聞きたいという望みにほかならなかった。浸水した村は屋根の上で助けを求むる声に満ちている。しかし、やがては家屋ともども濁流にのまれて、その声々も消えてゆく。その中に少女のみは、その家が堅固な造り故に濁流にも押し流されず、屋上でしきりに助けを求めている姿を見る。岸に避難している少女の老父母、使用人のたれもが、救助に行くのをためらっている中を、清次は筏を漕ぎ出して救助に向かう。途中で棹が折れて流されかけるが、水に飛びこみ、ようよう少女の許に達し相擁した刹那、家は流れてきた土蔵に突き当られ、人も家屋も水中に没する。後には、ただ、

「渺茫たる濁水の面、水平線上一切の遮る物もあらで、ただ清く輝ける天空の月、濁れる水の底深く沈めるを見るのみ。」

といった筋である。

この作品に見る雅俗折衷体や悲劇性、恋愛、死といった要素は、当時の投書家青年達の好んで取り扱うものであったらしく、『秀才文叢・前編』（三十年四月二七日発行）の応募小説の内容も選者の湊山人の概評によれば、

(1)悲劇性が多い。(2)その多くは死の結末、(3)雅俗折衷体が多く言文一致体は少ない、(4)継母子の関係を描くのが多い、(5)恋愛では幼な馴染を描く、(6)大家の模倣が少ない、(7)世話物が多く時代物は少ない。

とある。しかし、この作品の価値は、投書家好みの通俗性を多分にもちながらも、如何に労苦しても、農奴的桎梏を脱し得ず、絶望の果てに死を選ぶ青年を採りあげたという点に認めたいのである。

父母の位牌にぬかづいた清次は言う。

「聞きませ父母様も、あはれ父上母様の此の世に居ましたりし其時は、玉とも呼び子宝としも思はして朝夕引き伸さん計りに成長するを待ちに待ちて楽み給ひつるに……其の待ちに待たれて成長せし一人子は、まさしく世に長らへてありながら、死したる者と等しくて、世を終らざるべからずなりぬ。……父上も母上も家を興せ栄えしめよと宣ひにたれどああ、水野の家は絶え果てざるべからずなりぬ。己れ世にありても水野の家を興す事能はざらば、寧ろ悲しき憂き目に苦しまんよりは、死して御

膝元に孝養を尽さんと思ひ待るなり。聞きませ父母、自ら此の

二年の長き年月を責められ、懲らされ嘲られて汗と涙に過ごし
待りしが……いかにもして早く家をば興し参らせ、御心を慰め
んと力みに力みて……その汗も涙も回る血潮も借りし金の利
子のみとかや、斯くまでに力めてさへさる程なれば、此の上
いつの世にいかにして自由の身となりて家をば興す術待るべ
き已みなん、々々々……さて人の身は万物の霊長として称へ
らるると聞きつるに、其の尊き人の人の汗は涙は、循る血潮は
五十年の其命は、欺くも卑く賤しく価なきものなるにや。さて
もく……。」

と、慨歎するところに、当時の農村に多かつた作男の置かれた現実
への抗議をみるのである。

明治期の由良川はほとんど改修されておらず、原始河川とよばれ
る状態で、大雨が三、四年間降りつづくと、川縁の耕地は水没し、
泥に埋まったりした。^⑤大洪水になると、田畑家を流失して、清次
のような農奴的作男の境遇に身をおとす者がよくあった。彼らは豪
農の下男部屋に寝起きし、一生娶ることなく、飼殺し同然の生涯
をおえるのを常とした。

この作品は、こういった悲惨な下層細民を持ちながら、なお軍備
拡張と工業立国という課題のために、国民負担の増大をはかる政府

への抗議と読みたいと思う。

この作品の大洪水は、明治二十九年のものを題材としている。八
月三十日朝から降り出した雨は、夕刻より豪雨となり、府下で死者
二百四十一名、負傷者三百二二名、行方不明十八名、流水家屋千百
七十二戸（『京都府誌』）の被害を出したが、そのほとんどは、由良
川流域に集中した。由良川の水位は、福知山で七・九、河守町で十
三米に達し、「未曾有の大洪水、八月三十一日出水四丈余、河守三
区、関、金屋、波美浸水せり」という有様であった。

『秀才文叢』の入選者八十余名の中に入った飛泉の喜びは大きか
ったと想像できる。彼は感激を残さなかったが、彼の友人で、明治
三十年代に『よしあし草』の中心となって活躍した天眠小林政治は、
「何分にも原稿が活字になる機会の少なかつた其頃としてはこ
れらの雑誌（『少年文集』・『文庫』）に自分の作品が載るとい
ふ事は、私達文学少年に取ってどれだけ大きな喜びであったこ
とでせう。それは何物にも代へ難い愉快であり、又興奮でも
ありました。」^⑦

と書いているところからいえよう。

発明発見に傾注していた飛泉が、このように文芸雑誌に投稿する
ようになった契機は何か、私は京都の先輩に木船金雄がいたことが
大きいと考えている。木船は九年二月九日、舞鶴町近辺の村に生ま

れたというから、飛泉の二歳八ヶ月の年長であり、師範でも二年上級であった。彼は和郷と号し、『少年文庫』や、その後身の『文庫』の熱心な投稿者で、新体詩に名を得ていた。^⑧『文庫』に投稿するうち、河井醉茗や常陸の横瀬利根丸(後の夜雨)、信濃の塚原伏竜(後の島木赤彦)、伊良子清白とは書信の上で交際するようになり、特に清白とは親しい交際を持ったらしく、『文庫』第九卷第一号(三〇年三月廿日)には、「すずしろのやのの君に」と題する和郷の詩に唱和する清白の「春の光」の詩がみえて、二人のこまやかな交遊をうかがわせている。^⑩

飛泉は出身地も同じ加佐郡で、同様に貧しい家庭に育った和郷に、特別の親しみを覚えたとみえて、二人の親交は生涯続いたという。^⑪

清白との交遊も和郷との縁で始まった。清白は当時は京都府立医学校の学生であり、二十八、九年頃の彼の下宿は定かではないが、医学校在学中は、その近辺を離れずにいたというから、^⑫師範寄宿舎にいた和郷、飛泉としばしば会し、連れ立って寺町下る夷川辺の京都らしいひっそりした構えの本屋へ行くようなこともあったであろう。清白は二十八年十一月に、『文庫』の京都在任の寄稿家を集めて、「西都寄稿家第一集会」を開いたが、参集者も少なく、清白の「団体的組織と為し、名称を附し規則を命ず可き」という意図も否決されて、懇親会的な「単純な会合」におわってしまった。^⑬その後一年

半ほどたって、大阪在住の『文庫』、『青年文集』の投書家高須芳治郎、中村吉藏等が文学結社を起した。即ち三十年四月三日の難波の翁亭での「浪華青年文学会」の結成であった。七月には機関誌『よしあし草』が発刊された。早速、清白が近づき、天眠小林政治に酔茗へのさそいかけを勧める。当時、酔茗は、堺在住ながら『文庫』の記者であり、関西の投書家青年達にとって、文学的支柱の感があつた。天眠は三十一年八月十六日、酔茗宅を訪れて、『よしあし草』への協力を依頼した。^⑭この天眠の要請に応えて、十一月三日発行の第九号から酔茗は清白と共に新体詩を発表し、その後は、彼の傘下の『文庫』派詩人の清新な作品が誌上をかざることとなって、『よしあし草』詩壇は『文庫』の勢力下に入ることとなった。^⑮十二月一日、酔茗は大阪安土町書籍事務所で開かれた例会に出席し、彼の提唱で会の根本的改革が議せられ、その結果、本誌の革新及び編輯庶務会計の改選がなされて、酔茗は、中村春雨と共に編集部に入り、堺支会の創立も決定された。^⑯三十一年一月(第十号)の堺支会報告を見ると、本拠は堺市北旅籠町六番地の酔茗宅で、編輯に酔茗、庶務に河野通該、小林市次郎、岡本信次郎、会員には、鳳簪三郎等四十一人の名が見え、他に「差支ありて姓名の掲出を見合す」者三十四人とある。同じ欄に詩歌・俳句の選は堺支会でおこなり旨の記事があるが、このことは、『よしあし草』の小説は中村春雨、詩歌

が酔茗の分担になったことを物語っている。堺支会に並んで、五支部設立の報告がみえ、第四支部として、京都が名のりを上げている。発起人は、京都丸山也阿弥内・六里巽となっている。二月の例会には、酔茗が「浪華青年文学会」の称を「関西青年文学会」と改める議案を出し、全員一致の賛成で可決された。これは、大阪の文壇から広く関西の文壇へ雄飛しようとする酔茗の意図が考えられる。

京都支部が名のりをあげたといえ、支会結成が目標であったらしく、三十一年末頃から、清白や六里巽が動いていた。主唱者の清白が医学校の卒業試験に忙殺されていたから、なかなか結成にいたらなかったらしい。三十一年三月の『よしあし草』（第十二号）に、次の記事がみえる。

「京都支会ハ伊良子すずしろのや、六里巽両君を中心として、組織せらるる筈、尤もすずしろのや君は目下多忙寸隙を得給はぬ由なれば、六里君の御発奮を俟ちつつあり。」

やがて、飛泉も京都支会の会員となるのだが、その経緯を述べる前に小説「額の玉」以後の創作活動について述べることにする。

『文庫』第九卷第五号（明治三十一年五月）に小説「心の雲」を発表した。彼の体験にもとづいたもので、貧書生が学資を浪費して、困り果てているときに、友人とボートを漕ぎに出て、艇中で財布を拾う。親友のものとは思うが、返さないでいる。しかし、良心に責

められて横町に捨ててしまふ。その後は、自責の念から半病人となつて下宿にこもっていると、友人が見舞いに来る。そこで、すべてを告白して赦しを請うと、既に財布は落し物として、本人の許へかえっていること故、半信半疑の態。しかし、やがて二人は感動の涙にくれる。といった筋である。前作に比較して、口語文体で書かれ、貧書生の生活をビビッドに描き出している点は評価できるが、筋はまことに陳腐なもので、前作にはかなり劣るものと思える。記者の小鳥烏水、酔茗からはいささか褒めすぎの感のある讃辞が与えられた。烏水評は次の如くである。

「初めは道楽書生が寄つてたかつて、世話狂言を仕組んであるつもりで、おもしろ半分に見たが、中頃よりやうやく真面目になり、手に汗を握るほどの心地もしつ、末段「懺悔は実に精神の大赦を作り出すものである」に至り平生貯ふところの塵と垢とを併せて洒然滌ぎ了る、何等の快ぞ、筆力夭矯、婉と適と自在を極む、而して失はやや藻飾に乏しきにありと雖、千編一律の恋愛小説に頭痛きをおぼるるけふこのごろ、この警拔によりて僅に渴を慰するを得たるを喜ぶ。」

酔茗評は、

「八十銭―文沢堂本代十善哉四腕なぞと」の筆法を以て、苦もなく書き了りし処手腕侮る可からず、塵俗を抜く半天の朱霞の

如く、いやに小説ぶりたるものより、此書生流却って愛すべし、但財布を道に捨てて齋藤の手に返らしめたるは、細工のやうなれど、これは世間にままあることなれば、さまで咎むるに足らざるか。」

三十年代初頭の投稿雑誌中、最有力誌の『文庫』に、著名な両記者の讃辭を得て掲載されたことは、当時の投書家にとって、大なる名誉であったと思える。これに力を得たのか、三十一年十一月の『文庫』第十一卷第一号に「破屋」を発表した。丹波の公庄村生まれで、京都の呉服屋に奉公している青年が、福知山まで商用に出て、つい一夜の春を買い、五円の金を使い込み、両親に工面を頼もうと足をのぼすが、落ちぶれはてたわが屋の前に立つと、入ることもならずに、何か心に期すさまで、急ぎ足で立ち去るといった筋である。河守町や彼が一時期教員をしていた公庄村や近隣の立原村、福知山町を舞台にして、若者と道連れになった丁稚のやりとりを通して物語は発展し、好短編といえる。鳥水と五十嵐白蓮が批評を加えて、鳥水はこの作が近頃評家の云々する光明小説とでもいうべきか、程度にとどめたが、白蓮は難点を指摘しながらも

「君の作、地の文句に名の人を感せしむるものなくして、対語の上に惻々人を動かすものがある如し。力めて渾円成熟するに至らば、柳浪の墨を摩するを得べし。」

とほめてゐる。

翌三十二年一月の『文庫』第十一卷第三号には、「醒歎醉歎」を発表。人物の会話が巧みに書けている程度の平々凡々の失恋小説で、白蓮の批評も凡作なりとしている。三月には、『文庫』第一卷第六号に「濤声」という抒情的な作品を発表した。

学校で海軍大佐の航海談を聞いた私は、将来の方針を海上兵事の勤務に変更し、丹後半島への修学旅行にも勇躍参加する。網野から間人へかけての旅行中、うち寄せる波と戯れ、砂丘に埋れたグミを掘って、その赤い実を採る。波に見とれるうち、一行に遅れた自分は、いつか例の回想にふけている。それは故郷の河守で肺病にかかっている哀れな恋人お春のことであった。一足飛びに彼女の病床へ帰りたい。肺病によいと聞くこのような海岸で、自分が介抱しながら、養生させてやりたい。そんな想いのつる自分を、「ああいまはしき空想！ 自分は将来望みのある身軀だ、お春さんは、ああ既に他へ許嫁の身では無いか」と叱責する濤の聲、やがて、友人達に追いついた自分は、「始めて海を見たものだから、つい失敬した」と言い訳をする。それを付添教師は、「海軍の志望にも似合はない話じやないか、海を見たのは今度が始めてなんか？」と笑う。自分は思わず赤面する。しかし「それは、始めて海を見た事を笑はれた、それ故では無かった」のであった。

鳥水は「抒情、抒情ニツながら、よくしたり。好作者といふべし」と評し、白蓮は「未だ全く両者（抒情と叙情）調和の妙を示さざるを憾みとす、且ついま少し叙情の方を多くしてもよきやうに思ふ」と批評した。

私はこの作品の日本海と深い松林の描写が秀れていると思う。

「いつの間にやら舟が消えて終ったと思ふて居たら、自分は深い松林の中に入つて居た。亭々たる喬木は、寒国の朔風に吹き暴されて、黒ずんだ針の葉を突き立てて居る。木の間々々々には、哀な秋草が、幽かな風に戦いで、白っぽけに小さな花が、消えかかる露に咽んで、今一月も経たうものなら、独り萎んで行くのを恨むやうな姿である。それを慰めやうとするのか、根方を這い囲ぐる蟋蟀は、うら寂しい森の風に皺枯れた声をふり絞つて居る。深林の気は一種樹脂様の香氣を放つて、何となく深い息をさせられるさうに思はる。」

神経のゆきとどいた描写で、国木田独歩の「武蔵野」を思わせるものがある。

この作品中にあるように、飛泉はひととき、海軍志望を考えた時期があったのではなからうか。小学校長退職のち市政界に入った野心的な彼であれば、おとなしく小学校訓導の道を選ぶことに満足していたとは思えない。

年譜によれば在学中、『万朝報』の懸賞小説に当選して、それが尚武主義を標榜する学校側の問題とするところとなり、放校問題となったことがあった。当時、『万朝報』では、週一回ずつ懸賞小説の募集をおこなっていたのである。

小説ばかり書いていた飛泉が、二月には、『中学世界』^⑧第二巻第三号には珍しく新体詩を発表した。調べの流麗なだけの内容の空疎なものである。丙賞であった。

幽思 京都 真下滝郎

西のあなたは紅の、

今日の名残の残れども、

見よ東は暮れ果てて、

星さへ一ツ輝ける。

中略

哀れ今夜の深けもせば、

今年もやがて終らんを、

此一年の我わざは、

怎計りをか為し得たる。

幼き時の小河边に、

立ちて後ろを眺むれば、

黒き墓辺を燈籠の、

うら悲しくも照す哉。

明治三十二年三月、新築なつた愛宕郡上賀茂村字小山の校舎から卒業した。学校は三十一年四月から京都府師範学校と称していた。

- ① 『飛泉妙』西川百子編、昭和二年十月二十五日。
- ② 西川正治郎、号百子、百輝、『大阪毎日新聞』和歌山通信部記者。歌集『無産者』大正八年、『刀葉林地獄』大正十一年、がある。
- ③ ①に同じ。
- ④ 京都尋常師範学校生徒学資支給方式(明二五・二・二九府市達要約)
- ⑤ 『大江町風土記』第三部(一九七三)
- ⑥ 『河守小学校沿革史』明治二十九年の項、昭和五十年三月発行。
- ⑦ 『四十とせ前』附「その頃を語る」小林政治、昭和十四年九月。
- ⑧ 『文庫』第三卷第二号(明治二十九年)「寄書月日」読不書生、「傑作を数ふ」―新躰詩に於て……伊良子暉造君の「暉造の詩」、木船和郷の「青葉集」……同第七卷第五号(明治三十年十一月二十日)『文庫』の「新体詩」XYZ、「『国民新聞』の一記者は先月十日の紙上に於て『新体詩に就きて』と題し、従来新体詩の消長を述べたる末、言を吾少年團一派に及ぼして曰く、之に集まり来るもの少なからず。又た彼の少年團一派は、誰れ創設し誰れ首長たりしと云ふにあらざるも、年少気鋭の青年詩人が其の先輩に慊らず、別に天地を見出して抑壓のなき間に自由に發育し成長したるを以て想詞共に斬新なるものあり、藤村の想未だ至らず、羽衣の詞未だ整はず、紅葉会の人々の如き未だ詩に筆を染めざりし時に於て、此の派は己に酔茗、皓潔の名手を出だし、『孤猿』『人生』等の唱すべきもの少なからず。下つて伏竜、和郷、露子、みつほの諸子詞に想に又其形に才華縦横光彩燦爛たるものありき。」とみえる。
- ⑨ 『明治代表詩人』『伊良子清白』の章、河井醉茗、昭和十二年四月十五

日

- ⑩ 「すずしろのやの君に」―「丹波の山の白雪を／拂ひて来にし都路も／鴨川柳春浅く／吹く風寒き旅衣。(中略)君が庵を音なひて／語れば盡きぬ言の葉に／夜すがらかくて明すとも／思や胸に残るらめ(以下略)」「春の光」すずしろのや。「和郷ぬしはわが歌の友なり。都におはしころ、きみと共に紫野の春を尋ねしことありしが、こたび丹後よりふりはへて来たまひしかばまたかの野辺をそぞろありきするとて。―古京の花にあこがれて／画堂の壁にもうれつつ／昔をしみしきみとわれ／また見るべしと思ひきや。(以下略)」
- ⑪ 和郷の生いたちについては、彼の自伝的短編「おもひで」『文庫』第一卷第三号(明治二十八年十月十五日)にみえる。
- ⑫ 和郷の子息木船正雄氏の小生宛書簡
- ⑬ 『明治詩人伝』伊良子清白の章、久本久恵、昭和四十二年二月十日。
- ⑭ 「西都寄稿家第一集会の記」伊良子暉造記。十一月十日、午後一時より寺町今出川上る小松方に於て開会、参集者、小林深蔵、木船金雄、大宗教祐、生田盈五郎、吉岡吟蔵、伊良子暉造、紫田愛蔵、岸田国太郎、日置松蔵。発企人は中島、与謝野、伊良子とある。『文庫』第一卷第六号(明治二十八年十二月二十五日)。
- ⑮ 『明治詩人伝』与謝野鉄幹の章。
- ⑯ 『毛布五十年』「四十とせ前」と『よしあし草』の章、小林政治、昭和十九年六月五日。
- ⑰ 『よしあし草』の詞藻欄が第九号から俄然勃興し、酔茗、清白、夜雨、白浪、野水、露子、汀水、橋村、虹川、八朗氏等、所謂『文庫』派詩人精鋭組の清新なる佳作を誌上に掲げて、毎号股盛を極むるに至ったのは、一に河井氏の援助を得たからであった。小林政治の思い出。前掲書。

⑬ 『よしあし草』第二巻第十号(明治三十二年一月)、「堺支会報告」。

⑭ 『よしあし草』第十一号(明治三十二年二月)、「第一例会の記」。

⑮ 『中学世界』は博文館発行の投書雑誌。青年文壇の投稿欄で新詩集(七五調二十句以下)を募集した。

二二

飛泉は四月から、京都市立有濟尋常小學校の訓導となった。下宿は上京区新柳馬場上ルの安藤安吉という蒲団屋の二階であった。

この月の『よしあし草』第十三号に報告された「堺支会報告」の新入会員姓名に飛泉の名が後輩の渡辺幸作と共に見出せる。堺支会入会の理由は、三十二年一月報告の京都支部は有名無実の上、六里巽、清白の奔走にかかわらず、京都支会がまだ結成にならず、ひとまず酔茗の主宰する堺支会に選んだのであろう。入会報告と一緒に彼は短編「はゝのおもひ」を発表した。恋と家の義理の板挟みに悩む貧しい医学生と子を案じる母を描いたもので、医学生には恋愛のために卒業延期となった伊良子清白が、母には彼の母のすてが投影していると思える。飛泉は、生涯母を慕った人で、後に『明星』に発表した歌の中にも秀れた母恋いの歌がある。^①

七月九日の夕刻、十数名が集まって、「関西青年文学会京都支会」が誕生した。すでに姫路、岡山、神戸、奈良、東京、韓国に支会が結成されていた。結成に尽力した清白は、六月に医学校を卒業して、

「真下飛泉伝」の試み

父の医院を助けるために紀州へ去り、六里巽が東奔西走した結果、やっと誕生したという。^② 幹事には、六里巽、古島慶、真下滝郎(飛泉)がなった。会員には、大釜孤堂、渡辺幸作等がおり、支会は、市内河原町三条上ル下丸屋町六十五番邸に置いた。渡辺は京師在学中、大釜は大原野神社の宮司であった。

この頃は、「関西青年文学会」の活動は、地元でも中央でも認められて、当初の「大阪といふ物質的非文学的地に一導の新光彩を放たむ」^③とか、「我文壇に絶大の刺撃を与へて、進歩の前途を開き他方に於て金玉の名什を紹介して創作界の寂寥を破る」^④とかいう語が空虚な措辞でなくなりつつあり、意気軒昂たるものがあった。七月一日には、文学会が中心となって、土佐堀青年会館で「文学同好者夏季大会」が開かれ、米國哲学博士の半月湯浅吉郎の「ミルトンの失樂園について」の講演がおこなわれたときには、こうした文芸講演会の試みが商都大阪で最初であったにもかかわらず、六百余名の聴衆を集めた大成功であったことなぞは、会員達に大きな自信を与えた。三十三年一月の『よしあし草』(第二十二号)に「恭賀新年」のもとに名を連らねている支会は八、支部は五となっているが、^⑤三月にはまた一つ、明石支会が設立されたことが報じられ、京都でも、さきに結成した京都支会へ、飛泉の師範での同窓撫水林田久吾を含む九名の新入会があった。

一月から、大阪南本町の仏教書肆・金尾文淵堂から芸文雑誌『ふた葉』が創刊されて、『よしあし草』と対抗する形となったが、会員達はこちらの方が潑刺たる精彩を放っていると自信を持っていた。^④

三十三年四月、『明星』が創刊された。鉄幹は三十二年三月の『よしあし草』（第十二号）に和歌を発表したり、懸賞募集の和歌の選者になるなどして、文学会と結びつき、また三月二十日には、来堺して、高師浜に河野鉄南、宅雁月、小林泉舟、辻本秋雨ら堺支会々員と交歓し、^⑤四月三日の「関西青年文学会」の「垂水における文学同好者大会」には、周防徳山から祝電を寄せるなどして、積極的に会員に近づいていたから、三十三年三月の『よしあし草』（第二十号）には、一頁全部を『明星』の広告に宛て、四月には、酔茗の別号と思える無絃が、「文会」の『明星』出づ」という記事を書くなどして、文学会の組織をあげて、支援する意向が見える。また、堺支会は三十二年十一月に会員で組織していた和歌グループ「新星座」の詠草を、『明星』に発表するかたちで、支援体制を組み、それに倣ってか、三十三年七月には、京都支会でも、「紫明会」を結成している。^⑥

『明星』が出た翌月、『よしあし草』は休刊し、六月の第二十六号をもって、終刊となった。これは、三十一年二月に高須梅溪、三十二年八月頃には、中村春雨、三十三年五月には、酔茗が上京した

ことが、大きな理由であったと思える。しかし、天眠や堀部靖文はこれをもって、同人を解散する意図は先頭なくて、矢鳥誠進堂発行の『わか紫』と合併して、『関西文学』と改めて、刊行することとなり、天眠と中山鼻庵が編集にあたり、宮本此君庵がこれを助けて、三十三年八月十日、第一号が発行になったが、三十四年二月の第六号をもって、廃刊となった。その理由は、矢鳥誠進堂の「新著出版日に多く、為に事務非常に繁忙を極め」る故とするが、「上京せる文学学問攻組も在阪の財界組も各自の道に専門的に精進すべき時期」^⑦になっていたことが、原因であったと思われる。

飛泉が『よしあし草』『関西文学』に発表したものは、既に紹介した「ははのおもひ」の他に、三十二年十一月（第二十号）の「製糸工女」（社会百方面）、三十三年一月（第三十二号）の「わたいれ」、三月（第二十四号）の「行路難」等の創作や短歌数首がある。「社会百方面」はシリーズもので、三十二年二月から三十三年三月まで続き、毎号、作者をかえて、下層細民とよばれた人々をルポルターージュ風に描いたものであった。内田魯庵が「社会百面相」と題して、「明治三十年代の前半期の日本社会の種々相を穿ち出した」^⑧のに類似しているが、その魯庵の著作が三十三、四年作であるのに先んじて、「下層細民」の悲惨な現実を凝視したという点で、評価されるべきであると思う。

飛泉の「製糸工女」は故郷の河守の製糸工女の生活を描いたものだが、尋常小学校を出たばかりや、高等小学校在学中の少女の苛酷な労働、工場内の不健康な環境、風紀の悪さが詳細に描写されている。かつて、飛泉が年少の労働者として働いていた体験や、帰省する度に見聞したことが、この作品を成功させているといえよう。

飛泉の歌が「明星」に掲載されたのは、第八号（明治三十三年十一月二十七日）からで、

鐘つきが鐘つく堂に我ものぼり都の秋の暮れを見しかな

たらちねの其ふるさとと云ふ国の月をみたり秋旅に暮れぬ

の二首が、新詩社詠草「大我小我」の欄に各地の会員の詠草とともに収録されている。このおりの草稿と考えるものが、甥の真下和夫氏宅にあって、三十四首中わずか二首が採用されているにすぎず、非常に厳しい選がなされたことがわかる。三十四年の『明星』掲載の短歌は、第拾号（三四・一・一刊）に三首、第拾壹号（三四・二・二三刊）に二首、第拾貳号（三四・五・二五刊）二首、第拾四号（三四・八・一刊）四首、第拾五号（三四・九・五刊）に三首、第拾六号（三四・一〇・五刊）六首、第拾七号（三四・一一・一五刊）であるが、厳選の上に、鉄幹の改作も多く、第拾七号にでた、小野山の竹にかげある里の宵踊りの月にもいひそめしは原作では、

「真下飛泉伝」の試み

京を東二里山科の里の宵踊りの月に曇かきのありけり

となっており、もとのおもかげなきまでに筆が加えられている。そして、第拾八号（三四・一二・一五刊）の「鉄幹歌話」には、右の一首を採りあげて、

「小野山は山科のあたりげに竹多き里の盆踊、京より見にゆくも面白かるべし。況してや里の今小町頬かぶり姿風情よろしく、心ありて無くて袖袂引き引きし其夜の月取分け身にしむものなりけらし。」

と評するという妙なことになっている。

飛泉の歌の傾向は、『明星派』の特色とされる、天才主義的或いは唯美主義的傾向には遠く、実感に支えられた抑制された情緒が表現されている。次のものは、そういった例にあたらう。

ひんがしの虹をくぐると行き行きて恋しき国の母の村に入りぬ

（第拾壹号）

国をいでて高きのにほりふりかえり誇るべき地の低きをみたり

（第拾六号）

橋立の文珠にくれて御詠歌の母の背による小さき子なりし

（第拾八号）

この三十四年は、『文庫』投稿者としても活躍し、三十三年秋に東山・清水寺畔松岡屋で開催した「京都文庫誌友会」の記事を第十

六卷四号（明治三十四年一月十五日）に書いているところからみると、この頃は、京都の『文庫』投稿者中の中心的位置にあったことがわかる。この号に、短編「花の冠」を発表したが、教師生活の喜びを綴ったもので、青年教師の幼い教え子へのあふれるような愛情がにじみ出ている。同じ年の第十七卷第三号に発表した「雲やけ」も同様に教師を主人公にしたもので、高等小学校の生徒を引率して、海村へ修学旅行に出た教師と生徒の魂のふれ合い、それをとりまく質朴な農村の人情が破綻なく描き出された作品である。前作が記者千葉江東と五十嵐白蓮の好評を受けたにかかわらず、後者は記者の評もなく、秀れた作品であるから、不思議な感じがするが、前作と同傾向ということが災いして、高い評価を受けなかったのではないかと思う。

三十四年、飛泉は京都美術工芸学校図案科の学生の岡直道と知り合った。岡と知己になるきっかけを作ったのは、既に『明星』が縁で友人となっていた田中喜作であった。田中は、京都七条通の醬油屋の若主人であった。田中と岡とは、高等小学校以来の友人で、小学校時代、ともに図画が得意で、風変りな図画教師に可愛いがられ、芸術家になることを誓い合っていた。しかし、田中は、家業にふさわしい商業学校に進まされ、三年で中退していた。一方、岡は父母をなくしていたが、父の友人の僧に養われて、志望通りの道へ進ん

でいた。三人は、自分達の会をオーロラブラザーフッドと名づけ、飛泉と田中が一年前から始めていた回覧雑誌『京扇』を熱心に編集した。短歌や所感を書きつけ、岡が装幀や挿絵を凝りに凝って旋すのであった。^⑭岡は三人の内、最もロマンチストで、キリストと恋愛と芸術が彼の生命のすべてであった。ロレンゾと号し、ロセッティを崇拜し、晶子の歌を絵画に表現しようとして試みていた。^⑮

三十五年一月二日、「関西文学同好者新年大会」が、大阪北区北野の「朝妻楼」で京阪在住の文学青年達を統合して開かれた。発起人は、金尾文淵堂主人の金尾思西、小林天眠であった。『文庫』や『明星』や『小天地』に広告し、出席者を募ったから、九州方面からの参加者もあった。^⑯鉄幹、酔者、烏水といった中央文壇で活躍する人も下阪し、鉄幹、烏水は一場の演説を試みたりした。^⑰

当日の京都からの参加者は、飛泉、鮫島大俗、西川百子で、百子は十六歳の中学生、会での最年少であった。この少年は、やがて飛泉の生涯の友となるのだが、まだ交遊は生じていなかった。^⑱

鉄幹のこの西下には、晶子も同行したが、この新年大会には参加せず、当日は堺の実家へ行ったという。晶子は三日には北浜の宿で鉄幹と落ち合い、四日には鉄幹夫妻は烏水と共に入浴した。この一行の世話を飛泉がした。烏水は帰浜後、飛泉に礼状を認め、飛泉はそれに応えて、

「さてこそ、近年になきうれしき正月にて候ひしかな」と記し、一首、

かくて世を鞭とる男京にありせめて一度顧みたまへ

と添えた。²⁸この出会で、幾首かの歌ができ、一月二十日『明星』に投稿した。歌稿をみると、二十首投稿し、七首採られている。²⁹このように多くの歌が入選したのは始めてで、末尾に鉄幹は、「佳作頗に多し、ねたましく候」といささか阿諛に似た評を書き添えている。

さきの新年大会で、新詩社支部の結成促進が議せられたものか、『明星』通巻二十一号（明治三十五年三月一日）では、京都、大阪、神戸、岡山、名古屋等十五支部の設立報告をみることができ、京都支部は飛泉の下宿が宛てられており、支部活動については、西川百子が回想記の中で次のように述べている。

「その頃飛泉君はまだ独身で、上京区新柳馬場孫橋上ル安藤といふ蒲団屋の二階に間借り生活をしており、其処を与謝野寛先生が草創当時の新詩社京都支部の所在地に充てられてゐたので、私どもは毎月一回か二回の例会には、その二階へゴソゴソと上って行ったことです。まだ電灯も引いてゐない六畳敷の室には、ランプのもとに七・八人の支部員や同好者が集まって、『明星』の近況を語りあったり、支部の出詠を互評したり、誰もが愉快

に寛いで夜の更けるのを忘れました。そして、雑談がいわゆる濟むと、当時読売新聞に続編連載中の「金色夜叉」、その初編の熱海の海岸のところを、飛泉君が克明に写し取った綴を持ち出して、私達にそれを朗読して聞かせて呉れました。『月が、月が、月が曇ったら貫一は』といふところなど、飛泉君の声は顫ひを帯びて、胸に惻々と迫るものがあります。誰れもがその心臓に貫一と同じ鼓動を覚えて朗読が濟むと、ほっと息ついたものです。³⁰」

この会には、まだ早稲田に入学していない相馬御風の顔もあった。御風は三高受験のため京都へ出てきたが、佐伯大太郎という文学好きの青年と知り合い、その姉のツヤが、『明星』派の歌人で、飛泉と親しかったから、その縁で飛泉と親しくなった。当時のことを御風は次のように書いている。

「そもそも私が佐伯大太郎君の紹介で、初めて真下さんにお目にかかったのは、私の十九才の年であった。その頃田舎の中学を出たばかりの私は、京都の或知人の家に厄介になって上級学校へ入るべく準備をしてゐた。さうした田舎出の、少しばかり文学がぶれをした、小生意気な青年であった私を、一見まるで親身の弟かなどのやうにかあいがってくださいって、痒いところへ手のとどくやうな指導と鞭鞭を与へてくださったのは真下さ

んであった。私は美しい夢ばかり見てゐたあの頃の自分をたまたまなく懐しくおもふと共に、一人息子として育てられて来た私に、生まれて始めて兄らしい愛を感じさせて貰つたあの頃の真下さんを、永久に慕はずにゐられない。」

この御風相馬昌治も三十五年末には、早大に入學すべく去つていった。当時の京都支部の例会の常連は、西川百子、林田撫水、田中喜作、田中美風^⑩といった人々であつた。

① やさしくもうら淋しさの秋ごとに母の御袖を恋しと思ひぬ
教へ子の御母ありやに我いらへ高かりけるよ西の京の秋

故郷に母あり京に彼の子あり紀伊に君あり俄あり世あり

② 「京都支会報告」「これ迄此地に支部といふものありたるなれど其より堺支会に属せる会員もありて言はゞ別居のはらからの如く本会拡張の上には申も更なり堺界支会にも随分小面倒なる不都合もあるべしとして伊良子すゞしろのや君にも六里巽君にも嘗てよりつゞやいて居られしかど非常に忙し折柄なれば己むなく其儘になり来りし……雨も降り風も吹く七月九日といふ日の夕景より十数名来集し茲に首尾よく合同一致共に益本会の為に竭さんことを誓ふ運びに至りぬ。」とあつて、会員は十六名の名を連れ、以下次号とするが、次号に報告はない。『よしあし草』第十六号(明治三十二年七月)。

③④ 「迎新の辞」——『よしあし草』第二巻第一号(明治三十一年一月)。

⑤ 神戸、堺、岡山、姫路、東京、京都、和歌山、奈良、以上支会。河内、北条、津山、露葉団、玉造、以上支部。

⑥ 『四十とせ前』——「附その頃を語る」小林政治、昭和十四年九月六日。
⑦ 巻頭写真版の裏に短歌五首、和歌欄に「みをつくし」二十首を發表。

⑧ 和歌欄「はまゆふ」、「三月廿二日与謝野鉄幹氏と高師の浜に会して大に詩を語りふ；席を同ふせしもの鉄南雁月泉舟秋雨の諸子あり。』よしあし草」第十三号(明治三十二年四月)。

⑨ 『よしあし草』第十三号。

⑩ 「我が紫明会はなれり、其第一会を去る七月八日鴨東五条なる鉄骨庵に開きぬ。」——「紫明会詠草」の欄、「関西文学」第壹号(明治三十三年八月)。

⑪ 『関西文学』第三十二号(明治三十四年二月)。

⑫ 「関西青年文学会的全貌」雑報よしあし草と関西文学——藤田福夫『国語国文』(昭和十二年十二月)。

⑬ 「社会百面相」下、解説、猪野謙二、岩波文庫。

⑭ 巻紙の歌稿には次の歌が書かれ、よくないものは全体に朱線を引き、よいものには○をつけ、改むべきは横に記入するというふうに出歌されている。(○印以外はすべて朱線がひかれています)

炭焼は恋を得知らで安らけく山に住まふかさきくあれをのこ。

朝毎に雪の山路を馬ひきて炭送り出す老ひたるやもめ。

夜深き場末の茶屋にすもとの酒にひたるか影うつる障子。

幕下に腕こばぬきてうづくまる若きすもとり末たのもしき。

豊かなる落穂うれしみ白鶏の稲置の下に高く歌ふかな。

御所柿に慰め得たる妹は帰り来ますと思ふかなき母。

密かにお祝ひ申たる

蟹肥えて岩に甲干す秋の水や君の初子のうぶ湯とすべく。

○誰か為に君はさばかりやせにけんつれなき人のねたくもある哉。

天長節

一鉢の机の上の白菊におもひ遙げく祝ふ今月哉。

束髪といふ題を得て

丸窓のうばらのかげによみますは何のふみぞもあげまきの君。
日毎日毎字びの庭のゆきかへりあへども知らずあげまきの君。

松置

己がじし得たるきのこひを争ひてほらこぬはなきはらから三たり。
我やきぬ日頃たしめる栗なればなめてもみよや病める妹。

病中吟

日頃よりなれがたしめる栗ぞとたまへる母の瘦せましたるよ。
栗多き片山里に宿りして夜すがら落つる音を聞しかな。

堂

〇〇 鍾つきが鍾つく楼に我ものぼり都の秋の暮を見るかな。

紅のみ空の星にわかうどははしき妹よと塚を抱きぬ。

石を抱き母よとなきし少女子は知らぬ墓にも水など手向けつ。

白雲も行きかてにして聞くらしや歌がたりする山の上の庵

遠つ沖に大竜まきの起れりと雄々しく叫ぶこの軍艦。

はゝえみしやさしく臨終の妹よ天なる神のよばひましたる。

別れにのぞみて

此日頃よからぬことのつゞきつゝ君に別るの今日ぞうたてき。

旅ながらすすぎが中につくくゝと停む君を夢に見しかな。

〇 別れては又遇ふこともわかずなどぎれごとながら云ひますな君。

國のをも

〇〇 たらちねの其ふるさとと云ふ所月にたゝすむ我旅にして。

みたり ね

母上の生れ給ひしこの村よ小川の岸に白萩のさく。

「真下飛泉」の試み

蓬頭にして郷関に入る我をしも慰むらしや白萩のはな。

ひな歌を唄ひ競ふる少女等のはばかりもなき声のうれしき。

誰あらぬ秋の花野を乙女子が騒かにくたふ想夫恋かな。

妹よ名は白うりかして紫の表紙やつけんなれが歌集。

紫の振の小袖のますそには小松が原の海のあけぼの。

(以上二首紫と云ふ題を得て)

土産には朱繻やよけん色は何妹はかへして紫をこそ

(これも)

かりそめにかきし画すがた似たりしはうれしき事のあるにやあらぬ

後れじと船よびとめて旅人の薄が原の道を急ぐかな

十一月七日夜

鉄妄批

⑮ 当日の準備委員は、萩村愁眉郎(発企人)、真下飛泉、伊藤紫雨、三

宅星、鈴木露村、池田毒水、葉山春彦、小西土陽であった。この会は、

「晩秋を期して大々的誌友会を開くことを相談すべくやった所の準備小

集たるに過ぎぬ」と書いている。当日の参集者十三名。

⑯ 「まず洗ひ髪の江戸美人とも云った様の、心ゆく許り瀟洒な、そして

其キチンと緊って居る、一駄の句調と云ふ者は、実に一句も増すべから

ず、一字も減すべからずと評したい位、何としても文庫本欄近來の佳

作と云ふに憚らぬ(江東)。

これは甚くはめましたね。山や水や散々眼に慣れたものを描くことをや

めて、専ら可愛らしいのの一举一動を写したので、大きに珍らしくも思

はれるが、併し一字一句の増減をゆるさぬといふ程、たいさうな文章で

もありますまい(白蓮)。

⑰ 「真下飛泉氏遺稿、事実談の手記「我友の記」大正六年二月起稿未完

(一)『京都日出新聞』(昭和五年十月十三日)。

⑮ 「オーロラ、ブラザーフッド、ロレンゾ岡直道君の遺作―情死―血のゆるぎ―虹の使―二人の遺作を語る」林田久吾、岡の「血のゆるぎ」は晶子の、「われと燃え情火環に身を捲きぬ心はいざら行方知れずも」の色彩表現であったという⑯に同じ。

⑯ 鹿尾島より時任霧峯の参加あり。

⑰ 「次で鉄幹と、烏水と趣味に関する一場の演説があり。」「大阪に於ける文学同好者新年大会」『文庫』第十九卷第五号(明治三十五年二月)。

⑱ 「二十八年前の思ひ出」『百子居叢書第二編』西川百子編

⑳ 「如是世相」『文庫』第二十卷第二号(明治三十五年九月)

㉑ 旅ながらさながら故郷の深情け比叡に雪見宇年又暮るゝ(○以外朱緑)

うらぶれの京の七年そは夢の悔なき除夜と一人に誇る

詩は新た

ぞ た は

〇〇 舊き去れさても初日に迎へつる日記よ願はく悔をとどむな

門松に栄ある袖の紫や小息一息羽子あたたむる

鞠を手にサロンの集はふところに初の三日を君は昔に

(以下二首夢虹君)

〇〇 唄しどろ、手鞠も、とろの兄人やと紫袖の人に笑はれますな

し 羽子たく君

夜を霜に歌なき性質の二人なり春とささやく加茂川ごもり

くいす

〇〇 宿世似て笑みに鞭執る男なり京を御夢のはしにだにとこそ(烏水兄へ)

星空の遠に御二人祝ぐ柳京を擬宝珠のからかねつめた

(御二人様へ以下)

〇〇 幸ありて嵯峨春寒の水に添ふあつき情けを今師にみつる

すくせの

紫の比叡金色の黎明の縁白梅林おこりの窓や

絃をたゞいて歌ふ高声の白梅つゝみいづこと問ふな 再考

〇〇 紅梅の戸なる優名を痛む子におぞや白壁指かましむる、

真畫

回廊に緋桃そがひの三の姫手鞠上手の唄のしどろや

堤長う緋桃を嫁ぐ舟よ舟、君か。あなやの石の假寝よ

行きくゞて緋桃を水のぬるからはよき子あらんに旅笠すてよ

地に曳いて柳芽ぶくむ川の午をよき夢得るや旅笠の君

踏むに地の男の子世に立つ花紅し。あらん。アトラに進むの女神

御叱正

真下飛泉郎

与謝野先生 一月二十日

あき子様

鉄

佳作頃に多しねたましく候。

⑳ 「飛泉君と美風君の事ども」西川百輝『上方』一〇四号(昭和十四年

八月一日)。

㉑ 相馬御風「兄らしい愛を感じさせて貰った」『飛泉抄』所収。

㉒ 京都の人、旧派の歌人冷泉為紀、園美蔭を師としたが後「明星」に参

加。「加茂川」等九冊の自選歌集をもつ。

(S 54・11・10)